



Anthology:02

She is He.

## 花に雪（市川イチ）

---

鍵がない。

帰りの学級会までは、確かにポケットにあったのに――。

もう何度目かわからないため息が、胸の底からこぼれ出た。いつもポケットに手を入れればすぐに触れる冷たい金属の感触が、今はない。ランドセルの底も、ふでばこの中も、お財布の中も、ありそうな場所は全部確かめたのにどこにもない。一体どうしてこんなことになってしまったのか、途方に暮れて流花はうつむいた。

学校と家との距離は歩いて二十分きっかりで、いつもは寄り道をすることもない。まっすぐ登校して、まっすぐ帰る。今日だってそうだ。だから、その間のどこかに落ちているはずなのに、寒空の下をかれこれ三往復してみても、どこにも見つけれなかった。

――どうしよう。

心細くなってきて、流花は唇を噛み締めた。お母さんは毎日五時半にアパートに帰ってくる。だからいつも流花が先に帰って、ご飯を炊いたりお風呂の掃除をしたり、テレビを見たりして待っている。時々簡単なおかずも作る。流花はもう六年生で、「お姉さん」なのだから。そうするうち、表の階段を上がってくるヒールの音が聞こえて、流花はああ今日もお母さんが無事に帰ってきてくれたと、ほっと胸をなで下ろすのだ。

でも今日はそうはいかない。このままじゃうちに帰れない。アパートの鍵というものは、母娘ふたり暮らしのささやかな所帯を守る、とても大事なもののなのだ。何かと物騒になった近頃の世の中を、お母さんははっきりとは言わないけれどもものすごく心配していて、寝る前の戸締りなどは大げさなぐらい確認する。そのあたりのことは、流花にもよくわかっている。

――どうしよう！

心臓がどかどか言い出した。熱をもった目のふちに、じわりと涙がにじんできくる。だが、流花が目をぬぐおうとするより一足先に、ずっと頭上に垂れこめていた灰色の雲のほうに限界とばかりに泣き始めた。このうえ雨まで降ってこられたら、もうどうすることもできない。一月の雨は冷たくて、体も心も芯まで冷やす。寒いし、心細いし、一時間近くも歩き続けた足はすっかり疲れて棒みたいだ。

涙でくもった目を拭いて、白い息を吐きながらもう一度あたりを見渡したとき、すぐ目の前に小さなカフェがあるのに気がついた。建物と建物の中にひよいとおさまっている感じの、こぢんまりした白っぽいお店だ。その軒先が、いかにもここで雨宿りしなさいと言わんばかりにせり出している。通り面はガラス張りだが、店内は暗くてよく見えない。電気がついていないということは、やってないのかもしれない。でも軒先を借りるだけなら構わなさそうだ。

逡巡しているあいだにも、雨はどんどんひどくなる。流花は思い切ってそこに飛び込んだ。

振り返って間一髪、とたんに大降りが始まった。針の滝が落ちてくるような勢いだ。こんなとき、お母さんが一緒にいてくれたら、こういう雨はすぐ止むわよと教えてくれるけど、今の流花はひとりぽっちで、そのうえ鍵をなくして帰れない。時間はもう五時をまわった。もし流花がアパートに帰ってなかったら、お母さん、なんて思うだろう。流花は携帯も持っていない。お母

さんには、流花がどこでどうしているかわからない。

また泣きたくなくてきて、深々とため息をついた、その時だった。

後ろで何かの気配がして、流花は反射的に振り向いた。ガラスの向こうに誰かがいる。びっくりして凍りついた流花の真横で、重たげなドアがゆっくりと開き――

「どうしたの、お嬢ちゃん」

という声が、雨の中でも何故かはっきりと聞き取れた。

## けものみち（ナナツ）

---

ねえ。ちょっと聞いてちょうだい。私の身の上話をお酒一杯分。

あなた、アルコールは好き？ 好きでも嫌いでもなくて得意ならちょっとごめんなさい。無味無臭の肴を食べさせる事になるけど我慢して。味気がなくておいしいとは思えない話だから。すでに酔っているのならいいけれど。さらっと流してもらえればそれでいいの。ただ、今はここにいてちょうだい。お願いよ。

じゃあ、始めるわね。なんだか愉快だわ。小さい頃見た……ほら、なんていうのかしら。紙で出来たとっても小さな舞台上で踊る……糸で繋がれた手足を十字の木で操るの……ああ、マリオネット、そうそう、それよ。糸でつるされた愛らしい人形になったようね。自分の事を愛らしいだなんて、中々言える台詞じゃないわねえ。いいじゃない、自分を愛しむ事ぐらい。だって、自分だけよ。私の事を心の底から理解して、側にいてくれるのって。例え、自分の事がよくわからなくてもね、私という存在はここにいるのだから。

あらいけない。お酒、もうすぐなくなっちゃうわね。酔いが消えないうちにもう一杯分、聞いてちょうだい。

私ね、過去がないの。「小さい頃見た」って言ったばかりなのに、変な話よね。記憶じゃないの。過去を語ってくれる人がいない。思い出の中に私はいないのよ。

それってとても不安定で気持ち悪いわ。根無し草っていうのかしら。流浪の旅のように漂っている。幽霊になるってこういう事なのかしら。

もう少し身近な例で言えば、何の意味もわからない問題を一人で解いて、さあ答え合わせってところで答えがどこにもない感じ。それが当たっているのかどうかすらわからない、当たりもはずれもないテストよ。自由と言えば聞こえがいいわね。それでも、自由はある程度の檻の中じゃないと楽しく動き回れないものなのよ。不憫な生き物よね……ううん、この考えは私だけかもしれない。

誰でもいい。仲間がいたら。そんな事を思わずに済んだのかもしれない。私には味方にすべき人はいなかったから。

だから、通りすがりでもいい、あなたが私を見つけてくれて本当によかった。私はまだ存在しているのね。アルコールで溶けていなくなってないわね。

ねえ、あなた。ご両親はまだご健在？ ……そう、もういないの。じゃあ、私と一緒にね。言った通り、私の味方はどこにもいないの。私を繋ぎとめる血はどこにもいないわ。

それでも、一人で生まれたわけじゃないのよ。お父さんお母さんっていう存在は確かにいたわ。役割として、だったけど。私を生むための必要要素としてそこにいた。酷い言い方かもしれないけど、子供の私から見た両親はそうとしか言いようがなかった。大人になった今でもそう思ってしまうわ。いつまで思春期背負ってるのよって感じよね。笑っちゃう！

そんな私の両親は、揃ってアルコール中毒だった。アルコールの海にいないと呼吸ができない人たちだったわ。

それだけじゃない。お父さんなんて、気が付けばころっと死んでいた。振り返って見たらもうい

ませんでしたって感じ。

ずっと、死の螺旋階段は落ち続けていた。アルコールが細胞を一つ一つ溶かしていくの。酒にのまれるんじゃない、食われていくの。ネズミみたいに、カリカリっていたずらしていくのね。

でも、死ぬ時は意外とあっさりしたものだった。

あなたの両親は.....交通事故で亡くしたのね。それは悲劇だわ。何の前触れもなく消えるのって怖い。心構えてある程度欲しいわよね。悲しい気持ちすら味わえないもの。なんて、言ってしまったら失礼よね。まるであなたを理解しているみたい.....。私の「ころっと」とは違うわ。死を知っての「ころっと」よりも、ずっとずっと辛いもの。なんて.....死を比べてしまうのはよくないわね。